

沖縄戦の生活史と戦後沖縄社会の構造変容

立命館大学 岸政彦

沖縄を「社会的に」調査研究する、ということは、どのようなことだろうか。本報告では、私自身の調査プロジェクトを紹介し、沖縄の実証的な社会学的研究がどのように可能かについて考えたい。

沖縄社会の生成と変容を、沖縄の戦後史を体験した個人の生活史から描き出す。これが現在おこなっている私の調査プロジェクトの目的である。

これまで沖縄戦体験者の語りは、戦時経験だけに限定されることが多かった。しかしここでは、戦前から始まり、沖縄戦での生き残り経験、復興期の生活再建の物語、復帰前の高度成長期における生活戦略、そして今日に至る人生の語りを収集し、沖縄社会の戦後の継時的な構造変容を、個人の生活史から分析する。

今年までに、すでに38名の沖縄戦体験者からその生活史を聞き取っている。そこで得られた戦前から沖縄戦を経て戦後の成長期にまでいたる語りのなかで、沖縄社会の構築を考えるうえできわめて重要なエピソードがいくつも語られている。その多くが、戦前から戦後の成長期にかけて、沖縄でみられた、ある種の「社会秩序の一時停止状態」という歴史的事実について語られていたのである。

この状態とは一言でいえば、「所有権」が曖昧になり、あるいは強制的に取り上げられ、そしてその隙間で「早い者勝ち」ルールによってあらたな所有関係がふたたび形成されていくプロセスである。

こうした現象は、沖縄戦の最中だけでなく、すでに戦前の日本兵の駐屯から始まっていて、そして戦後の復興期を経て、高度成長期にまで続いている。今回、聞き取り調査のテーマを沖縄戦だけに限定せず、その後の長い人生を含む生活史を聞くということに設定したために、この、「所有関係の解体と再編成」のプロセスを克明に聞き出し、そして複数の時代にまたがるこのプロセスを、ひとつの統一した経験として統合して考えることができた。生活史調査という手法の有効性もまた、本調査によって確認することができたのである。

戦前から戦後にかけて沖縄が経験した「所有権の解体と再編成」を、沖縄社会の「はじまりの経験」と呼ぼう。そして、この「はじまりの経験」によって、現在もなお残る沖縄的な社会規範や慣習が形成されていったのではないか。これが本研究における仮説である。

同時に、歴史的変動と個人的経験を統合的に理解する生活史調査の方法についても議論したい。現在、生活史（ライフヒストリー／ライフストーリー）は、どちらかといえば個人的・主観的な語りの分析に重きを置かれていた。その伝統を受け継ぎながらも、もういちど客観的な「歴史と構造」に結びつけることで、社会変動と個人の経験をトータルに把握するための方法論を模索している。

上記のプロジェクトを紹介しながら、沖縄を「世俗的に」「実証的に」語る社会学の成立にむけて、さまざまな論点について考察する。